

延寶の金澤圖に、主馬町の入口今井源四郎の向ひ熊内與一郎、その上隣毛利準之助とあり。元祿六年の土帳に、毛利又八郎右衛門橋福嶋淺右衛門と一所、毛利又太夫馬坂の下三吉助左衛門上。とありて、準之助死後に主馬町の居邸を移轉せしと聞ゆ。

○毛利準之助詮益傳

毛利準之助詮益が祖は、尾張將監と云ひ、其の子吉兵衛、其の子勘太夫後養幸と稱す。是詮益が父なり。寛文十一年に進達せし準之助由緒帳に云ふ。祖父毛利吉兵衛、淺野但馬守殿に知行五百石賜はり罷有り、父毛利養幸、秀頼公に罷在り、四十五年以前に御國へ罷越し、寛文元年率人にて病死仕る。準之助儀は寛永十八年に微妙公へ小々姓に被召出、正保元年に御射手與力に被仰付、同年之暮二百石拜領仕る。とありて、享保十六年孫李兵衛の由緒帳に、祖父毛利準之助、貞享四年十二月八日五十九歳に而病死仕る。と載せたり。按ずるに、寛文十一年の土帳に、二百石射手組四十三歳毛利準之助。と見られたれば、寛永六年の生にて、同十八年十三歳にて兒小姓に召出され、夫れより利常卿に奉

仕せし人も。拾葉名言記二卷は即ち準之助の筆記にて、利常卿の遺事を記載す。奥書に如左あり。右此一書之外。大坂表御働之時。利常卿一番乗被遊候儀、天下無其隠。則御家之記依具除之。此一卷者、世粹之自時分、御次廻罷在承傳事共撰集而、依印銘拾葉名言記。寔鶴毫忠揚者齊矣。以此意不願不才。書之者也。

天和二年九月 日 毛利準之助詮益書

一本の奥書に、此書者、依授或人不願愚毫、如本書武江向岳於旅亭享保七壬寅孟夏旬日寫終畢。と記載す。馬淵高定の武家混目集にも、此の書の事を擧げたり。按ずるに、利常卿の遺事は、世に微妙公御夜話或は微妙公御直言或は微妙公御發語など、號し、平常の御行狀及び近侍の人々へ語り給へる夜話共をば書きつらねつれど、先づ後人の傳話を擧げたるゆゑ、事實に齟齬する事なきにあらず。毛利準之助が筆記せし拾葉名言記は、實に寛永十八年より近侍して、親しく御身近に奉仕して拜聴せし直話共を集録せり。其の功勞實に賞するに堪へたり。故に今爰に其の傳略を記載す。

○幸領之者組地

延寶の金澤圖にこゝに掲げたる如く記載す。この組地は、後々までも輕卒の組地と成り居しかど、幸領足輕といふは早く絶えたり。岩原惠規の筆記に云ふ。三壺記の撰者山田四郎右衛門は、幸領足輕なり。最前は此の名目の足輕有るなりと。平次按ずるに、元祿十四年書上げたる定番足輕安江市郎兵衛由緒帳に、父安江太左衛門御鐵炮之者に被召抱、承應元年幸領之者に被仰付。とあり。されば利常卿小松に在城し給ふ頃、幸領足輕といふ一組ありし事知られけり。寶永七年山田四郎右衛門が事を綱紀御尋ねに付き、割場奉行より言上したれば、幸領足輕も割場の支配なりしこと知らる。

○山田四郎右衛門傳

馬淵高定の武家混目集に云ふ。三壺記は山田四郎右衛門と云ふ者の書集めたる物也。輕き者に、かやうに後の寶と成る事をば勤めて殘し置くとは難有事也。さしも歴々の何のわざもなく、名を空しく死にゆく事淺ましき事なり。加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。三壺記は前田家の舊說等を書載

